



谷口 研二

奈良工業高等専門学校 校長

終戦後から続いた高度経済成長期には、多くの若者が、ものづくりの現場で働いて、互いに知恵を出し合ってより良い製品を作り、人々が喜んで買ってくれる商品を大量に生産してきました。「より良いものを、より安く、大量に」をモットーに製品作りに励む日本のものづくりの力は海外でも高く評価され、日本の企業経営、労使関係、会社への帰属意識、などが詳しく分析されて、その一部は欧米の企業の経営にも生かされてきました。その間、日本では、労働者が会社の発展を願いながら「わが社の製品」を作る喜びを感じていました。そのような国民性もあって、日本は世界でも有数のものづくり大国になりました。リーマンショック以降は為替の影響もあって工場の海外移転が進みましたが、現地で日本流のものづくりを実践して様々な軋轢が生じたことは良く知られています。ものづくりの国際分業が進んでいる今だからこそ、私たちは世界の人々と協調・協力しながら工業製品を作ることが求められます。

巷では「グローバル化＝英語の習得」が喧伝されていますが、語学はコミュニケーションをとる一つの手段です。最も大切なことは現地の人々と真摯に向き合い、信頼関係を作り上げることです。ある企業の部長さんは「海外で活躍できる人は決して語学堪能な人ではありません、率先して現地に溶け込める人です」と語っていました。現地で信頼関係を築くには、相手を気遣う配慮が必要で、現地の言葉も少し覚えて、ものの考え方(価値観)を理解した上で、その地に適したものづくりの環境を整えることが大切です。海外ではそれぞれ国ごとに違った価値観があり、働き方も違います。日本のように深夜まで働く社会もありますが、「仕事は9時から17時まで」と割り切って個人の生活を楽しむ社会もあ

ります。わが国の価値観を他国の人々に押し付けると「余計なお世話!」と言われかねません。

その一方で、私たちが国内で生活している限り、考え方や価値観の違いを明確に意識することはほとんどありません。従うべきルールを小さい頃から徹底的に教え込まれた多くの日本人の考え方や行動が同質化しているのがその原因です。逆に、考え方が明確に違くと、人間関係が上手くいかず、ときには「いじめ」の対象になることもあります。

国毎に考え方が違う例として、昔、私は米国のスキー場にゲレンデの範囲を示すロープが張られていないことに驚きました。スロープの先に危険な崖があってもロープが張られていません。「エキスパート・オンリー」の立て札があるだけです。これは、断崖を飛び降りるのは本人の自由で、その結果生じた責任も本人が負うべきという考えに基づいています。日本では、災害や事故が起こる度に新しい規則が作られて住民の安全を確保することが優先されます。責任を管理者側に求める日本と、自己責任が基本と考える米国の国民性の違いが表れた例と言えるでしょう。

海外で想定外の事態に出会った時に冷静な対応ができる力をつけるには、海外経験をすることが近道で、まさに「百聞は一見にしかず」です。本校では、本科生を対象とした海外派遣プログラム(シンガポールのポリテク派遣)、専攻科生を対象とした短期留学(海外交流協定締結校への派遣、期間4週間)があります。派遣先に滞する短い期間だけでなく、事前の準備期間中に英語を学んだり、日本の文化・歴史を再認識することも大切です。異文化の中で国民性の違いを感じる絶好のチャンスです。機会があればぜひ参加してください。さらに、日本学生支援機構では若者の海外派遣を推し進めるため「トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラム」を始めました。産業界の意向を踏まえた実践的な学びを目的として、若者を海外に送り出すプログラムです。採用人数に対して高専枠が設定されており、採用された留学生には毎月の奨学金、旅費、学費などが支給されます。若いときの海外体験は極めて貴重です。この機会に海外に長期間留学して、グローバル意識を高める努力をしてみたいかがででしょう。

実は、国内にいても擬似的な海外体験ができます。本校はマレーシア、インドネシア、モンゴル、ブラジルなど世界中から留学生を受け入れています。身近にいる留学生と友達になって、国民性や価値観の違いを実感してください。彼らの言葉の端々に、新鮮なものの方や奇抜なアイデアを感じて、きっと驚くことでしょう。そんな経験を通してグローバルな感覚を身に付けて、近い将来、海外だけでなく国内でも活躍してくれることを期待しています。

